

「ここから『御膳を御覽じても』『物を一口きこしめしても』『ただ仏恩の尊きことをのみ思召し』『万事につけてよきことを思いつくるは御恩なり、悪しきことだに思いすてたるは御恩なり、するもとるも御恩なり』とか、『仏法の上は何事も報謝と存すべきなり』等と、日常喫茶喫飯の一一から広く人間行為の全般をも感恩報謝の心情においてうけとられたことは、我々の特に見逃しえないところである。

かくして蓮師における報恩称名の内包は限りなき拡がりをもちつつ、正しく我々の信の生活行為一切を包むこととなる。しかもそれは特に報恩の行為であることにおいて、自ら能く為すの思いをはなれ、ただ為さしめ給う仏恩のおんはからいのみが荷われている。従つてそこには当為もなく停滞もなく、また限界もない。およそ一切の行為の中にこれほど美しく、力強い行為はないであろう。ここに私は「御報恩のために御念仏ころに入れて申して、世の中安穩なれ、仏法ひろまれと思召すべし」との宗祖の教示を改めて憶念しつつ、蓮師における報恩称名の教条の中に他力真宗の信の生活原理が平明・積極、且つ効果的に懇説せられている事実をおもふものである。

法華経安樂行品について

松見得忍

古来より法華の四要品として方便、寿量、安樂、普門の四品をかぞえている。之は周知の如く文句記によつたものである。ここでは安樂行品が要品となぜ数えられて来たのか。安樂行品の真意はどこにあるか。それ等を考えてみたい。

法華経は太子の言われる如く万善同歸、万善皆成仏、仏寿長達を教える。然らばいかにして成仏するか。成仏の条件、成仏のための修行は何か。考えてみるとこの經典には所謂、「行」はないのではない。万善成仏の語が示めすように、万善、これ成仏の因ならざるはなしと言ふべきであらう。然しその万善成仏と言う中で第一の善行は何か。云く、法華経を聞くことである。即ち一偈一句をきき一念随喜せん者は成仏が決定されるのである。太子が、法師品の註釈の下で「諸の修行の中、この経を聞くに如かずとなり」と述べておられることは法師品の意義を明すと共に、法華経の修行の要点が「聞」の一字にあることを教えるのではあるまいか。つまり法華経の行は法華経を聞くことから出発するのである。然しそれは単に聞くことではない。法師品に説くように「この經典をきくことを得ることあらん者は乃ち能く菩薩の道を行ずる也」とあつて菩薩道を行ずることにほかならぬ。このよう

な意味で安樂行品は説かれていると思われる。

安樂行品は文殊の問によって始る。「菩薩摩訶薩後の惡世に於て云何がしか能く是の經を説かん」。之に對して四安樂行が説かれる。即ち身・口・意・誓願の安樂行である。然らば安樂とは何か。文句には「安樂とは即ち大涅槃なり」―「行とは即ち涅槃の道にして因に從て名を得るなり」―「安樂行は是れ涅槃の道なり」とある。このように安樂行こそ涅槃の道であり、而も大切なことは安樂行が惡世に於て新發退墮の類にとつての唯一の行である」と明されし太子の御見解である。義疏には「四安樂行有り、菩薩若し能く此の四安樂行を修せば、惡世に在り」と雖も憂慮すべきことなし」と記されている。このように安樂行は下品の人の行である。ここに万善成仏の意義がある。

太子はこの問題について、

今此の四行において、前の三行は是れ自行にして、後の一慈悲行は是れ外化行なり。菩薩の道は、將に、他を正しうせんと欲するには先ず己が身を正しうす。己を正しうするの要は三行に如くは莫く、他を正しうするの要は慈悲をもつて本と為すなり。天下の万行は羅なると雖も、要は必ず此の二行にあり。菩薩もし能く此の四行を修せば、上は則ち、諸仏の稱嘆したまふ所となり。中は則ち諸天の護念する所となり。下は則ち諸人の供敬する所となる。然れば則ち復惡世なりと雖も、刀杖の因、惡鬼入身の亂を憂ふること無く、況んや復、求名比丘毀謗の辱、惡僧邪律之噴^{かきらす}しきをや。所以に如来はこの四行に拠つて勸むることを為したまう也。

と述べられた。ここで注意すべきことは安樂行と言わず、身善行、口善行、意善行、慈悲行と名づけられしことである。之は太子の独特なものであるが光宅疏にその意はあらわれているかに思われる。

さてこの第一の身安樂行とは、菩薩の行処、親近処に安住して衆生のために經を説くことである。行処とは柔和忍辱に住することであり、太子は「言うところは仮名空を觀じ能く是非を亡じ善に於ても卒かに喜ばず、惡に於ても亦卒かに驚かさざれとなり」と註せられた。之は光宅師も文句も大体同じ考え方である。

この行処に至る為に親近処が必要で、行処と親近処との關係は、太子が「行処」とは即ち是れ身の行善にして、「近処」とは即ち身の止善と言われた太子の言がよく示している。この親近処については遠ざくべきものに即して親近すべきを明している。その遠ざくべきものとは文句八下に示めざる十種の不親近処であり十惱亂とも言われる。即ち修行を妨ぐるものである。この十惱亂については光宅、天台、太子、大体同じである。唯ここで特に注目したいことは、太子は經典の十惱亂の次にある、「常好坐禪」以下の文を、第十番目の不親近処とされ、「常に坐することを好む小乗の禪師に親近せざれとなり」と一般には親近処と考うべきところを不親近処とされ、光宅の考を批判し、又、經典をも独自に読んでおられる。その理由を太子は義疏に、

言うところは顛倒分別の心有るに由るが故に此を捨てて彼の山間に就き常に坐禪を好むとなり。然れば何の暇あつてか此の經を世間に弘通することを得ん。故に知ぬ。常好坐禪は猶底に親

近せざるの境に入るべきことを。と示めされてある。

之の点は太子の研究者であられる前東大の花山教授が太子の独創的見解、本質精神を基礎とされた太子仏教の特色として岩波文庫本の解題にも述べられてある。

然し常好坐禪の一句は十惱乱の結論であり同時に十惱乱に親近せざる帰結として可能なのであるから、どうしてもそのように読むことは無理であろう。嘉祥の義疏にも「心の撰することは観の始めに在るべし。何が故に終りに在るや。答う、諸縁を遠離する由って方に心を撰することを得るのみ」とある。

又南条訳梵本をみると常好坐禪の文はなく、ただ偈頌の方には「賢者は心を時にせめ、静室に入りて行を為し、是等諸法を内観、勇猛心をもって出でてゆけ」とある。又法漢訳の偈頌にも「菩薩時あつて静室に入り正憶念を以て義に随つて法を觀じ禪定より起つて諸の国王、王子、臣民……の為に開化演暢してこの經典を説かば、其の心安穩にして怯弱あることなけん」とある。之等の文からみると常好坐禪は法華弘通の勇猛心を得んためである。従て花山教授の御説には疑問をもつものである。太子がこのように解釈を施されずとも太子の御立場をそこなうことはない。終りに法華文贊九本に

常に闍闔を離れて独り閑居に処するにて初學者には応に自ら静かに住すべしと誡め、久學者には身閑に処すと雖も心常に静かなれと誡むるが故なり。

と常好坐禪のところで註釈している。私はこの見解こそ正しき解明であると思う。

善導捨身説批判

野上俊静

善導の伝記において、もっとも重要な問題の一つは、善導が捨身されたか否かということである。これまで、諸先学の主張されるところは、殆んど例外なく捨身否定説であつて、その論証も、頗る精緻である。ただし、必ずしも妥当なものと認めうるわけではない。

およそ、善導の伝は、約三十にのぼる多数の文獻にみえてゐるが、そのうち重要なものは、つぎの四つである。

一 統高僧伝

二 瑞応刪伝

三 浄土往生伝 戒珠撰

四 新修往生伝 王古撰

『統高僧伝』は、道宣が善導の在世中に著わしたものであるから、勿論その臨終のことは記していない。中唐時代の少康・文認の共撰といわれる『瑞應刪伝』には、善導の捨身を記していない。ようやく、宋の戒珠の『往生伝』に至つて、捨身の事実をつたえている。そして、王古の『新修往生伝』になると、善導と善道の二つの伝をたてて、前者は捨身し、後者は普通に往生されたとする。すなわち、善導の捨身は、戒珠『往生伝』にはじまり、王古